様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年　４月２７日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９５３０２８６
研究課題名（和文）
地域経済の活性化と地域金融機関の役割
研究課題名（英文）
Revitalization of the Rural Economy and Role of Regional Financial Institution

研究代表者
小藤　康夫（KOFUJI YASUO）
専修大学・商学部・教授
研究者番号：６０１４２８３２

研究代表者の専門分野：金融論
科研費の分科・細目：経済学　財政学・金融論
キーワード：リレーションシップバンキング　地域金融機関　アクションプログラム　目利き

１．研究計画の概要

金融庁が新旧アクションプログラムで訴えたことは、地域金融機関が持つ「目利き能力」を十分に発揮し、創業・新事業といった将来の収益を生み出すと思われる新規分野に向けて積極的に投融資を展開していくことであった。

これにより、地域は活性化され、同時に地域金融機関が抱える一部の不良債権も健全化されるからである。さらに財務力の高まりから地域金融機関は新規分野に向けた投融資を展開する可能性も高まってくる。創業・新事業と地域金融機関の相互作用がうまく噛みあえば、地域経済も地域金融機関も一層発展していくことになる。

だが、アクションプログラムに従って各地域金融機関から報告された取組み状況を具体的に見ていくと、金融庁が描いたプログラムのように展開できていないことがわかる。単純に解釈すれば、地域金融機関が目利き能力を発揮できていないことが金融庁の期待を裏切る結果を招いたように見える。

しかしながら、わが国の地域金融機関は不良債権問題から完全に脱却しているわけではない。そうした状況のもとでは地域金融機関がいくら目利き能力を発揮し、新規産業に向けてリスクを取るように金融庁から指導を受けても、なかなか実行することは難しい。

金融庁のアクションプログラムが当初の計画ほどの成果を生み出していないのは、財務力の脆弱性にあると考えられる。本研究ではそのことを現実と理論をバランスよく組み合わせながら説明し、将来の方向性を示唆するのが目的である。

２．研究の進捗状況

３年を経過した時点で、ほぼ目的を達成できる見通しが立った。必要な資料や文献もフォローし、それに基づきながら論理を組み立て着実に論文を書き、それを４年目に完全な形でまとめ上げることが可能となっている。

まず、平成１９年度では「貸手である金融機関の内部組織のエージェンシー問題」について取り上げた。中小企業金融では借手によるエージェンシー問題を克服する方法としてリレーションシップバンキングが有効な手段であることを見出している。

次に平成２０年度では「金融庁によるリレーションシップバンキング政策の有効性」について分析した。ここではリレバン効果と目利き機能を分けることで、目利き機能が景気回復効果と同じ波及経路を描くことを見出している。

日本経済が景気回復の局面を迎えるなかで一部の地域金融機関が積極的に中小企業へ貸し付ける場面もあったが、この分析に従えば必ずしも金融庁によるリレーションシップバンキングの成果が表れたのではなく、景気回復の恩恵を受けたに過ぎないと解釈できる。そのことを本研究では強調している。

続く平成２１年度では「新しい中小企業金融と押しのけ効果」について分析している。ここではクレジット・スコアリング貸出など大手銀行が中小企業に向けた新しい金融手段の効果が扱われている。

大手証券から大手銀行そして地域金融機

関に向かう波及メカニズムをシステムダイナミックスのモデルを通して明示し、従来の中小企業金融の姿を描くと同時に、大手銀行もその分野で重要な役割を果たすことを示唆している。これにより地域金融機関の果たす役割も変化せざるを得ないことを明らかにしている。

３．現在までの達成度

ほぼ予定通りに進んでいる。今年度で確実に完成できると考えている。

平成１９年度から２１年度の３カ年の研究はほぼ当初の計画通り進み、その結果を論文の形で表わしている。しかも、システムダイナミックスのソフトを駆使しながら、全体の内容をまとめ、その政策効果も見出している。

ただ、当初の計画では中小企業金融の実態調査を試みる予定であったが、本務校での教育上の仕事もあり、時間がなかなかとれなかったため、出張ができなかった。平成２２年度に実行するようにしたいと考えている。

４．今後の研究の推進方策

前半に研究成果として一冊の研究書をまとめた。さらに後半の研究も別の研究書として発表する予定である。本として整理するにはかなり煩雑な作業も必要となるが、来年３月までに２冊目の本を出版したいと考えている。

そのためには少なくとも平成２１年度の成果をもう一度見直し、その研究を推し進めるようにしないと研究書としてまとまらない。そうした作業を中心にしながら最後の年度を締めくくりたい。

もちろん、２冊目の研究書のほかに４年間の成果をまとめる作用も残されている。この仕事は１冊目の研究書を合わせた形で整理し、製本していく予定である。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①小藤康夫「金融機関の公的資金注入は信用収縮を回避できるか」　『商学論集』（専修大学）2009 年 11 月　第 90 号　pp. 37-51　査読無

②小藤康夫「新しい中小企業金融と押しのけ効果」『商学研究所報』第 41 巻　第 1 号　2009 年 6 月　pp. 1-23　査読無

③小藤康夫「金融庁によるリレバン政策の有効性」『専修大学都市政策研究センター論文集』（専修大学大学院社会知性開発研究センター）　第 4 号　2008 年 3 月　pp. 149-165　査読無

〔学会発表〕（計５件）

〔図書〕（計３件）

①小藤康夫『決算から見た生保業界の変貌』税務経理協会　p. 133　2009 年 11 月 1 日

②小藤康夫『中小企業金融の新展開』税務経理協会　p. 131　2009 年 1 月 25 日